

アーキビスト／文化関係職員という仕事

福島 幸宏

○あらかじめの言い訳

私は大学院博士後期課程に一九九八年に入学し二〇〇四年まで在籍しました。大阪市大には博士課程からでしたし、その前に一種の自己形成らしきものを不十分ながら養ってしまっていたので、市大の気風や作法というものを十分身につけられているかは判然としません。また、いまとなつては歴史学の間人というよりも、ゆるく、アーキビストという一般的に知られていない職分にいると自覚しています。そんな人間ですが、これまでの取り組みや近況を少しだけ紹介させていただき、その上で、申し上げたいことをごく軽く書いてみます。市大日本史学会に集う方々に、少しでも別の世界を紹介できるきっかけになればと願いながら。

○職場での仕事内容

私は二〇〇五年四月から京都府立総合資料館に勤務しています。この資料館は京都市左京区の地下鉄烏丸線北山駅の直上に位置する京都府の直営施設です。博物館・図書館・公文書館の機能を併せ持つ複合館で、MLA複合館としては全国最大規模のものになります。

私はここで重要文化財である「京都府行政文書」を含む、京都府の公文書の保存・活用を担当してきました。京都府の各課で保存年限が過ぎた文書を引継ぎ、整備し、保存をはかりながら公開することが業務の軸になります。これらに携わりながら、特に日常の閲覧業務やレファレンス対応、大学の授業の受入など利用者サービスの充実を行ってきました。

以下、この一〇年間で印象に残った業務を点描してみます。

まず、就職してすぐに「京都府行政文書を中心とした近代行政文書についての史科学研究」の科研費研究の運営を担当しました。これは近代行政文書を文化財と扱うための基礎的情報を集積する目的で行われた科研で、多くの院生アルバイトに資料のデータを取って貰いながら、保存科学・アーカイブ学・文化財学・歴史学などの多くの研究者の方々とともに取り組んだものです。

この科研の成果を引き継いで、京都府行政文書の国庫補助金による修理事業の立ち上げも担当しました。これは重要文化財となった近代の紙資料についてはじめてのころみで、文化財の取り扱いの原則のなかで、従来の資料とはまったく素材も構成の原理もことなる行政文書をどこまで扱えるか、という検討の連続でした。この点、担当した文化財調査官とともに短い文章ですが課題を指摘しています。

また、資料の公開も担当のひとりとしてほそほそながら行ってきました。このなかでは「京都市明細図」の公開が特に反響を巻き起こしたものでした。京都市明細図は昭和初期に作成され、占領期まで書込

が続けられた約三〇〇枚からなる住宅地図のさきかげのような資料で、公開後すぐに京都の近代研究や街歩きに必須の資料としての地位を獲得しました。これは、大学と連携してデジタル化を早期に行い、さらに現在の地図と重ね合わせたサイトも早い時期に展開できたことによります。今や大学の諸活動の前提となつて、古い言葉となりつつありますが、官学連携の実のある成果となつたと自負しています。

さらに最近では国史「東寺百合文書」の世界記憶遺産候補への選定とweb公開をチームの一員として担当しました。東寺百合文書はもちろん近代資料ではないので通常の守備範囲外ですが、記憶遺産候補として日本ユネスコ国内委員会から声がかかった二〇一三年五月から、推薦書の作成や実際の候補選定など、連絡調整役としてサポートを行いました。また、デジタル化とweb公開を早急に行うこととなり、webサイト構築チームの一員となりました。この成果は「東寺百合文書WEB」(<http://hyakugo.kyoto.jp/>)として二〇一四年三月から公開しました。この際、利用ライセンスとして、「クリエイティブ・コモンズ日本表示 2.0」(CC BY)を採用しました。この点、文化財への対応は国内初ということもあり、非常に多くの反響を得ました。代表的なのは先進的な取り組みを行っている図書館等に与えられるLibrary of the Year 2014大賞を受賞したことでしょう。

○議題の広がり／社会的役割

一方、この間、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会(全史経協)と

この動きを見ていただいていた陸前高田市では、新たに公文書のク

りニングと電子化の事業を立ち上げ、現在も継続して行われています。

また、館内外でなんとか仕事をこなすなかで、声をかけていただく

いですが、私個人の鍛錬やあてがわれた環境だけではとても成し遂げ

しかし一方で、これらの跳躍の度にかかなりの逡巡をしますし、結

最後に、私が離れてからの10年の市大文学部・文学研究科を総括

機会が増えてきました。思いもよらぬさまざまな場に参加させていた

○跳躍すること/離れて懐懐すること

これまで「やっただことリスト」を書き並べて来ました。振り返る

さて、これから本題というか、みなさんに申し上げたいことです。

これまで紹介したような「やっただこと」がもし成果たりえていたら

は、人文学的思考によって、他者に対する知識に裏付けられた想像力

【註】

- (1) 当然素然なものですし、ずっと変化(成長とは言い難い)の過程にあり
- (2) しかし専門職とは言い難いと思っています。そう考える背景は福島孝宏
- (3) 2015年4月から京都府立図書館に異動になりました。組織や現場は
- (4) 歴史学からの見た公文書・公文書館制度の課題については、瀬畑源一
- (5) 成果は京都府立総合資料館編2008「京都府行政文書を中心とした近
- (6) 福島孝宏2009「京都府行政文書の重要文化財指定と課題」『アーカイブス』36号(国立公文書館)。
- (7) 京都市明細図については福島孝宏2011「京都市明細図」を読む

- を参照。平行して所屬館全体のデジタル・アーカイブの構築にも担当のひとりとして参画し、二〇一五年三月現在、「京の記憶ライブラリ」(<http://kyoto-shiryokan.jp/kyoto-memory/>)として公開されています。
- (8) この百合WEBへ反響は数多くありますが、まずは福島孝宏二〇一四「京都府立総合資料館による東寺百合文書のWEB公開とその反響」(カレントアウェアネス-E No.259 <http://current.ndl.go.jp/e1561>)を参照。
- (9) これは組織を無条件に延命させようとしたことではないことを各のため申しておきます。
- (10) 私個人としては二〇一一年四月下旬に福島県郡山市の避難所運営の支援に京都府職員として一週だけ入ったのが最初の被災地支援でした。
- (11) 市大日本史学会関係では島田克彦、山学院大学准教授に特段の「尽力をいただいたことを感戴したい。過酷な環境のなかでの彼の存在は特に心算かったです。
- (12) 文化資源についても多様な議論があるが、たとえば青柳正規二〇一四「我が国の文化資源活用に関わる課題について」(<https://bunkasigen.wordpress.com/2014/11/14/20140517-aoyagi-keynote/>)を参照。
- (13) この課題についての私の基本的スタンスは、福島孝宏二〇一四「地域拠点の形成と意義—デジタル文化資源の「資源」はどう開発されるのか?—」『デジタル文化資源の活用—地域の記憶とアーカイブ』(NPO 知覚資源イニシアティブ編、勉誠出版)を参照。
- (14) たとえば、大学院在籍中からその周辺に関わって、社会的に興味がある者としては慶應公開講座があります。「慶應限定公開」30周年記念シンポジウム実行委員会編二〇一四「「慶應」をきえる—慶應公開運動の30年」(新泉社)を参照。一方、どこからか勝ってくる話をいつたどだけ止めて考えることも重要です。たとえば、年齢が上がっていたので中心には関わりませんでした。大阪市立大学文学部・文学研究科教育促進支援機構(<http://yakitori.lit.osaka-cu.ac.jp/user/spel/>)の立ち上げの際には、当時の日本史研究権威員とかなりの議論があったはずですよ。

- (15) 「仕事」概念については、ハンナ・アレント、赤水蓮雄訳一九九四「人間の条件」(ちくま学芸文庫)、矢野久美子二〇一四「ハンナ・アレント「戦争の世紀」をよんだ政治哲学者」(中公新書)などを参照。
- (16) この前段として、「特定テーマにもとづく研究拠点形成のために、大きな枠組みを設定して個々の研究者の活動を縛るのではなく、個々の研究者の活動から生まれるネットワークや共同研究の芽を研究科に活かしていく方が効率的かつ効果的であろう。」とあることに注目されます。構造(システム)は、関わるモノの自覚・無自覚に関わらず、卓小な形で再生産されるのです。

(2014年3月大学院博士後期課程単位取得退学 京都府立図書館)

大阪府立大学日本史学会 2014年度

役員と会員数

委員	飯田直樹	大澤研一	岸本直文
	佐賀朝	徳満悠	仁木宏
	渡道孝尚	吉元加奈美	
学生委員 (任期1年)	王妍琳	濱中良子	
監査	柴原永遠男	八木滋	
会員数	一般会員(院生以上)	221名	
	準会員(学部卒業生1年目)	10名	
	学生会員	34名	
	合計	265名	

会

計 (2014年5月総会承認)

2013年度決算 (2013.4.1~2014.3.31)

【収入】		【支出】	
繰越金	603,716	印刷費	696,250
会費(一般)	549,000	通信費	68,610
会費(学生)	24,000	大会会場費	4,000
大会参加費	23,100	文房具	2,121
支援機構出版助成	40,000	抜刷代	9,500
一部売	6,000	繰越金	545,935
カンパ	43,100		
抜刷代	9,500		
雑収入	28,000		
	1,326,416		1,326,416

2014年度予算 (2013.4.1~2014.3.31)

【収入】		【支出】	
繰越金	545,935	印刷費	653,600
会費(一般)	600,000	通信費	50,000
会費(学生)	44,000	大会会場費	5,500
大会参加費	21,000	文房具	4,000
支援機構出版助成	40,000	封筒印刷費	48,400
一部売	6,000	予備費	495,435
	1,256,935		1,256,935

2014年度寄附者 (五十音順、敬称略)

岩本次郎	貝原孝一	門林真由美	善谷和子	熊谷光子	柴原永遠男
鷹森浩幸	高岡裕之	花本ゆり	林秀雄	藤井正太	藤本晋博
堀純一郎	森隆夫	ほか			

編集後記

今回の第18号では、昨年の大会の講演と3本の研究発表に加え、崎さんの論文を掲載しています。また、昭和三三年卒業の竹澤静之さんと中谷昌義さんに寄稿いただきました。この間、直木先生に始まり、何人かの方に情報をいただきながら、できるだけ年代のさかのぼる卒業生を捜しました。次号からも、卒業生の方を探り、日本史研究室の歴史を紡いでいきたいと思います。

いま、大学ミュージアムの構想を温めています。大学史資料室が既にあり、資料の収集や展示活動などを重ねていますが、一方で、例えば理学部の研究資料などは、定年退職とともに、大学に保管施設がないために、貴重な資料が学外へ流出しています。処分された資料もその背後に多くあったものと思います。市大の各分野の研究において、大阪や近畿圏を対象とするものがひとつの柱であり、これからもそうだろうと思います。大学の地域貢献が謳われていますが、市大の研究が大阪や近畿圏の歩みと一体で進められてきたこと、それを現在進行形のものとともに発信することが、とくに公立大学である市大にとって、その存在意義を端的に示す上で重要だと思います。

府立大学と統合されるとしても、その必要性に変わりありません。文科省のやろうとする研究する大学と地域貢献に生きる大学との仕分けなど展開しており、両者は一体であると思います。

(奥本)

市大日本史 第18号 2015年5月16日発行

編集 大阪府立大学日本史学会

発行 〒558-8585 大阪府住吉区杉本3-3-138 大阪府立大学大学院文学研究科気付

http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/~jhis/

印刷 藤原印刷株式会社

〒594-1102 和泉市和田町279-1 TEL 0725(55)3480

出版に際しては大阪府立大学文学部・文学研究科教育促進支援機構の助成を受けた。